

氏 名	金 泰福 (キム テボク)		
学 位 の 種 類	博 士 (芸 術)		
学 位 記 番 号	甲第 11 号		
学 位 授 与 日	平成 19 年 3 月 23 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
論 文 題 目	<b>「反-立体空間」の思考と可能性</b> <b>ーアサンブラージュ (Assemblage) における空間性の考察ー</b>		
審 査 委 員	主査 教 授	李 禹 煥	
	副査 教 授	本 江 邦 夫	
	副査 教 授	木 嶋 正 吾	
	副査 東京都庭園美術館副館長	塩 田 純 一	

## 内 容 の 要 旨

現実のオブジェが直接に画面に現れて以来、現代美術の展開過程は実に様々な形で変化してきた。それは伝統的なイリュージョン美学に逆らうものであり、オブジェの多様な表現方式の中から、いわゆる「アサンブラージュ (Assemblage)」という新しい領域が形成されてくる。20 世紀に入り、コラージュ (Collage) とオブジェ (Object) の登場によって現代美術に表面化したアサンブラージュは、多くの意味をもち、様々な形で表現されている。

アサンブラージュは工業製品の断片や日常的なオブジェをほぼそのまま取り入れることで「現実の直接的な提示」という積極的な方法論を採用している。ところが、アサンブラージュ技法の特性のなか、日常の多様な素材と材料などが結合されて現われる現象の一つとして「2 次元から 3 次元の転移」が考えられると思う。これはドナルド・ジャッドとレオ・スタインバーグが指摘する絵画とは言えない「全然違った形態」であろう。私はこの「全然違った形態」から、2 次元的な空間と 3 次元的な空間が融合した(あるいは接点としての)新しい空間での可能性を見ている。

私はアサンブラージュ作品を、彼らの様々な思想的な背景や論理が表現された結果物として注目しており、意図されたか否かとは関係なく、彼らが作り上げた形態を新しい空間認識の出発点にしている。さらにこの新しい空間を、私の作業における「反-立体」空間と呼んでいる。

この論文での「反-立体」での「反」は発展的な融合を想定した肯定的な否定の意

味を持っている。平面美と立体美が結合する意味を含んでいる「合」の概念は私の作業で「半立体」という形態で表われているので、彫刻（レリーフ）的な伝統意味として「反」の意味も含んでいる。

私の「反-立体」は、2次元的である‘平面的な要素’と3次元的である‘立体的な要素’が、お互い関係しあいながら構築された形態で表われている。ここでの‘平面的な要素’とは、平面という2次元的に限定された空間の空間構成を指し、また‘立体的な要素’は、3次元の光の明暗と関わりが深く、この光によってつくられる明暗が現実空間と関係していることで、この二つの要素を合わせると、正面性（「一つの方向性を持つ」という意味）を強調する平面的な様式をとる立体構成が出てくる。

平面的な空間と現実空間の接点といえる「反-立体空間」の意義は、ロバート・ローゼンバーグの「異質的なことの統合（コンバインペインティング）」の追求にあるのだろう。ここではウラジーミル・タトリンの作品のような現実的な材料の重畳と調合から、実在的な空間（陰影、あるいは陰陽のある空間）が生成されているのである。つまり反-立体作業は材料の多角的な使用による物質性とそこから現れた立体性が空間との密接な関係で作り上げたと考えてもよいのである。

こうした点で、私の「反-立体」作品の出発点は「非再現的な絵画」にあり、伝統的なレリーフと一致するところが多いかもしれないが、彫刻的なレリーフとは一線を画している。

こうした認識をもとにアサンブラージュたちの作品と私の作品を中心に、空間に対する分析を行い、私の作業の新たな‘場’としての可能性を探ってみようとする。

私は新しい美術、新しい概念の定立や主張をするのではなく、自ら作業を重ねながら、感覚的に洞察してきたこと、つまり今まであまり論議にならなかった「反-立体的な空間」に対する可能性と見解を制作者の観点で提示していきたいと思う。

本論文の流れは以下のとおりである。

私の作業はアサンブラージュから技法的な特徴を探ることができる。そこで、まず第1章ではアサンブラージュを中心に、その一般論的な概念と、その背景をオブジェの観点から時代的な流れと共に考察していく。特にこの論文で注目する「反-立体空間」概念が登場したと考えられる1960年代のアサンブラージュの状況とその特徴を述べ、20世紀美術におけるアサンブラージュの意義を論じていく。

第2章は、アサンブラージュから見られるが今まであまり論議されなかった‘空間性’について考えていきたい。私の観点から伝統的な絵画空間と彫刻空間を述べ、そこから考えられる私の作業の‘場’としての「反-立体空間」の概念を提示する。

第3章では私の作業を主なテーマにする。作品を通じて考えられる反-立体作業に対

する意味と、その展開においてあげられる特徴的な部分を論じ、「アサンブラージュにおける空間性の考察」を私の観点で仕上げていきたい。

私が論じている「反-立体空間」は、制作者として他人と区別される独創性を追及した欲求の形態から出てきた表現方法に関する研究として意味をおきたい。